

論文の要約

論文題目

サバイバルの詩学
—中国第一世代の女工をめぐるナラティブとジェンダー・ポリティクス—

氏名

陳 敏

論文内容の要約

本論文は小説を中心とする文学テキストにおいて、中国で清末から中華人民共和国建国後の1950年代までの間に女工という言葉で名指されてきた女性たちをめぐるナラティブを取り上げ、そうしたナラティブがどのように生産され、扱われてきて、そしてどのように変遷してきたのかを分析・考察するものである。

中国第一世代の女工たちは、下層女性が家庭の外で働きはじめるという性別役割分業の変化を背景として創出された、主に軽工業の工場で働く女性たちである。近年、社会学や歴史学、女性史といった分野においては女工のような労働者女性を主体的にとらえる研究が盛んに行われるようになってきている。そうした動向に対し、本論文は文学研究ではそれほど重要視されてこなかった中国の女工をあえて主体的にとらえる試みの一つである。研究方法は主にテキストの読解であるが、女工という当事者を吉見俊哉が指摘しているようにテキストの「決定的なインフォーマント（情報提供者）」としてとらえる。そして、一國主義的な文学観ではなくレイモンド・ウィリアムズが提示した「産業小説」の系譜において、つまり作家の個人的な経験を社会的、経済的な文脈と結びつけ、産業化という社会変動のなかにおいて作家が女工を書くという表象行為を考察する。それによって、産業小説の系譜を参照しつつ、従来中国文学では重要視されてこなかった中国の女工たちと近代的な都市空間との関係性や、女工を表象する際の書き手と労働者内部のジェンダー・ポリティクスに光をあてることができる。

第一章では、まず清末における女工をめぐる言説を整理し、女工を提唱することは当時、道徳的言説、行政的指示を通しての法律的言説、教育救国や実業救国などのナショナリズム的言説といった言説の複合的編成のひとつのありかたであったと指摘した。そうした背景を踏まえ、「女子権」と「中国新女豪」という二つの政治小説を女工を提唱する小説として位置づけた。その根拠は、新しく発見した資料によって作者思綺齋は清末の実業家であり、下層女性の職業教育に熱心であったことが明らかになったことである。さらに思綺齋は、才子佳人という枠組みのなかで書くことを戦略としていた。「中国新女豪」では、秋瑾及び秋瑾の弾詞小説『精衛石』を参考にし、女子留学生の英娘が日本の近代女子教育に倣って中国で女工伝習所及び女工場の設立に成功し、下から皇帝と皇后へ影響を与えて女工の振興を成し遂げられたという物語が描かれている。「女子権」では、清末の産業立国の思想や重商主義的な考えを小説に重要な要素として盛り込み、下層女性の自活自立を富国強兵と結び付けており、女性主人公は米国華商の出資を得て女工を振興させ、立身出世を果たし恋人と結ばれる。

第二章では、1920年代初頭を代表する男性作家郁達夫の短篇小説「春風沈酔の夜」をとりあげて考察した。郁達夫が描いた女工二妹は「労働神聖」というスローガンのもとで道徳意識が高く、素朴で性に目覚めていない少女であるが、当時の現実社会で生きる女工のイメージとはずれがある。男性作家のテキストにおいて女性労働者は、彼女の女性性が不可視化されたうえに、忍耐強く自己犠牲を惜しまない、社会の変革を生み出す可能性が潜んでいる理想像、すなわち<母なるもの>として規定される。また女工二妹はテキストにおいて、その<謎>のような目つきが解かれていくにつれて、作者の自己の再構築を促す客体として描かれるようになり、彼女の女性性やセクシュアリティは容赦なく排除されてしまったのである。こうした分析を通じ、女工を表象するにあたっての理想化と女性性への抑圧との間に生じる軋みが、郁達夫のテキストに対する矛盾した解釈を両立させているという結論を得た。

第三章では、1920年代後半から1930年代にかけての女工が<新女性>として浮上していく過程において「金」をキーワードとして女工を描いた三つの小説テキストを取り上げて

考察した。すなわち、五四新文化運動期の廬隱「魂は売ることができるか?」、五・三〇運動前後の葉聖陶「民間に在りて」、文壇が全面的に左傾化した1930年代初頭の杜衡「人と女」の三作品である。この作業で明らかになったのは、革命という名のもとで女工には革命予備軍としての<新女性>へと成長していくことが要請されていた一方で、過酷な労働や貧困を強いられていたにもかかわらず、彼女たちが生活のために主体的に「金」を欲しがることはしばしば女性特有の罪や弱さとみなされてきたことである。その原因としては、中産階級の女性作家の階級への執着や労働運動におけるジェンダー・ポリティクス、家父長制と資本主義の二重の抑圧などが考えられる。

第四章では、昭和モダニズム作家吉行エイスケの上海を題材とする作品集『新しき上海のプライベート』（先進社、1932年）を取り上げ、女工と近代的な都市空間との関係性を論じた。上海事変という歴史事件をもって上海というトポスが「革命的支那」と「暗黒街」に分節化され、女工は都市の周縁や暗部で秩序を攪乱するような存在として描き出されている。そして彼は経済学者久野豊彦によって紹介されたダグラス経済学説を文学に導入し、マルクス主義とは異なる視点から、女工を消費者として、欲望する身体としてみなしている。しかし彼のまなざしには、女工たちに一瞬の生を与えるという可能性がある一方で、植民主義と資本主義による搾取と支配を当然としている論理が潜んでいることを指摘した。

第五章では、順徳出身で生涯を通じて工場労働者を描き続けた女性作家である草明の創作生涯を前期と後期に分けて、女工表象と空間の関係を考察した。30年代の作品においては、順徳の女工たちは作者にとって身近な存在であって、一人称の語り手「私」のまなざしには郷土社会の家父長制に抵抗する「狂気」として映っている。その後の作品では、都会に入った失業女工はしばしば一人称の主人公「私」として描かれる。草明の初期創作においては、女工の「他者性」をある程度確保しつつも、女性作家と繰糸女工という階層の壁を越えて、同じ出身地、女性同士の連帯感、田舎から都市に入った女性の不安や葛藤といった共通点も一人称の語りによって浮かび上がっている。ところが40年代になると、草明は延安での生活を通して女と育児の役割から離脱し革命を抱擁するようになり、創作に

においても共産主義のイデオロギーに全面的に傾倒し、女工は彼女の作品において語りえぬ存在になった。体制側の作家としての彼女は重工業建設という国家の目標を表現するためにもっぱら男性労働者を英雄として描き、第一世代の女工の語りは彼女の作品から消えていったように見える。その代わりに、男性同じように国家の建設に貢献できる新しい世代の青年女工が彼女の作品に登場するようになった。しかし、男性ジェンダー化されている工場という空間においては、新しい世代の女工も結局周縁的な業務を割り当てられてしまうのである。

以上の考察を通して本論文は、近代中国において女工として生きることは階級、ジェンダー、セクシュアリティ、国家、エスニシティ、文化などさまざまな要素を交差させるインターセクショナルな経験であることが浮き彫りにした。文学テキストに描き出されているのは、貧困のために家を出て働く女性たちという単純化された姿だけでなく、作者の意図には必ずしも一致しないが、異なる時代や社会の動きに翻弄されつつ、それでもサバイバルしていく女性たちの姿なのである。